

# ジーンズ ハンドブック

THE JEANS HAND BOOK

(第2集)

繊維流通研究会

## 目 次

<b>第一章 ニットの商品知識</b> .....	4
<b>素材編・技術編</b>	
1. ニットの歴史	
2. ニットの種類	
3. ニットの特徴	
4. ニットの素材について	
5. 衣料用ニットの商品展開について	
6. ニット用原糸について	
7. ニットの加工技術の発達	
<b>第二章 ライフ・スタイルの変遷とジーンズ・カジュアルの関わり</b> .....	15
●ヒッピーの発生とジーンズ	
●ジーンズがブームに—1970年代前半	
●ジーニングという概念に発展	
●OUTDOOR (アウトドア) から SPORTS へ	
●デザイナー・ジーンズの登場	
●プレッピー・ルックとヨーロッパに於けるアメリカン・ルックの台頭	
●80年代に突入—ヨーロッパ・カジュアルの爆発的流行	
●クラシックの見直しとジーンズ・ファッション	
む す び	
<b>第三章 ジーンズ周辺のカジュアルウェアの知識</b> .....	36
はじめに	
I カジュアルウェアの今日的背景	
II ジーンズをめぐる「カジュアルウェア」の最近の沿革	
III カジュアルウェアのアイテム知識	
(1) アウター	
(2) シャツ, セーター他	
(3) ジーンズ以外のカジュアル系統のパンツ	
(4) 婦人アイテム	
む す び(ジーンズカジュアルウェアの今後)	

#### 第四章 プロの対応技術.....58

##### ＝販売員教育・応用編＝

お客様が変わった  
 「物不足時代」と「物余り時代」  
 好きな店、好きな販売員、好きな商品  
 店が面白いか  
 情報の価値とモノの価値

##### プロの対応

ひやかし客の対応技術  
 連れの多い客の対応技術  
 関連販売の対応技術  
 ほめ上手の対応技術  
 ファン客づくりの対応技術  
 返品交換客の対応技術  
 お客様のタイプ別対応技術

#### 第五章 転換期をむかえたジーンズショップ.....119

アイビー商事……“経営の開拓”を進める、2年間で15店をリニューアル  
 バル・グループ……マルチ路線の奏功 CPカンパニーも好調  
 ジョイント……ヤングレディスに対応 地域密着を目指す  
 ロンイレブン……地域固め終わり、外へ出ていく  
 ゴシボ……ジーンズショップの理想型を追求  
 レッド & ブラック……ヘルシー指向で新路線  
 むすび(これからのジーンズショップ)

## 第一章

## ニットの商品知識

## —素材編・技術編—

## 1. ニットの歴史

旧石器時代、人間が狩猟生活をしていた頃、火をおこしたり、住居をつくったり、また、衣服をまとって寒さをしのいでいました。

その頃、使われていた衣服の材料は、はじめ、動物の毛皮であったが、次第に植物の繊維状のもので、組物をつくったりして、手を加えるようになり、更に編物や織物へと進歩していったのです。

衣服としての最初のニットは、エジプトの墓で発見された靴下で、紀元前7～8世紀頃と推定されますが、その後エジプトからイタリアに伝えられました。

ニットが広く使われるようになったのは、ヨーロッパ各地で、14世紀前半ごろからであり、当時は、すべて手編であった。

ニットが機械化されたのは、1589年イギリスの牧師補、ウィリアム・リー (William Lee) による足踏式木製靴下製造機の発明が、最初であります。

当時、イギリスのエリザベス女王は、この発明が、手編靴下業者を失業させるものとして、製造の許可を与えなかったと伝えられております。

その後、1775年には、イギリスのクランが、たて編機を、1817年にアンドリュウスが、円型編機を、1849年には、マシュー・タウンゼントが、ベラ針を発明し、産業革命によって機械編が、急速に発達しました。

その後、更に編機に改良が加えられて進歩し、トリコット、ラッセル、ミラニーズなど複雑な編地へと、次々に変化し、世界に広くゆきわたるようになりました。

日本へニットが伝わったのは、16世紀中頃で、ポルトガル人が、手編の靴下、手袋を持ち込んだのが最初であります。

また、日本で最初に編機が登場したのは、明治3年、元佐野藩士・西村勝三が、横浜の外人商館から輸入したのものであると云われ、用途は、肌着、ももひき、たび、えり巻きなどで、材料は、毛、もめん、人絹などが使われていまし

た。

その後、ニットは肌着用として一般に普及することになり、衣料の分野で大きく伸びました。

昭和の時代には、中衣、外衣としてのニットも一般に広がり、戦後のカジュアルブーム、更に、昭和50年代前半のレジャースポーツブームの波に乗って、大きく飛躍したと云えます。

ニットが、ナイティー、Tシャツ、ポロシャツ、ゴルフシャツ、シャツブラウスなど、中衣として大きく用途が拡大し、素材メーカーにおいて、ニットのテキスタイル部門が、確立されましたが、その後、裏毛ブームが、50年代後半にかけて、ピークを迎え、用途は、外衣へ大きく広がって行きました。

ブルゾン、ジャケット、スウェット等の商品が次々と開発され、ニットが、本格的にアウター分野へ広がりを見せたのです。

裏毛が、そのリード役であったと云っても過言ではありません。

一方、編機に目を転ずると、生産性の高い新鋭丸編機が、次々に開発され、用途の拡大と共に、生産量は年々拡大していったのです。

## 2. ニットの種類

編物(生地及び二次製品)を総称して、最近ではニットと呼ぶことが多いが、用途に応じてメリヤス或は、ジャージーとも呼んでいます。

〈関連用語の説明〉

### ① ジャージー(Jersey)

語源は、英仏海峡にある島の名前“ジャージー島”に由来します。

本来、メリヤス生地及びその製品の総称であります。近年は、ジャケット、ブルゾン、コートなど、アウターウェアの呼称として、使用されています。

### ② メリヤス(莫大小)

語源は、スペイン語のメジヤス(MEDIAS)であると云われています。

徳川時代のはじめ、スペイン人により伝えられました。用途は肌着が主体であったことから、現在は、肌着用途の編物をメリヤスと呼ぶことが多い。

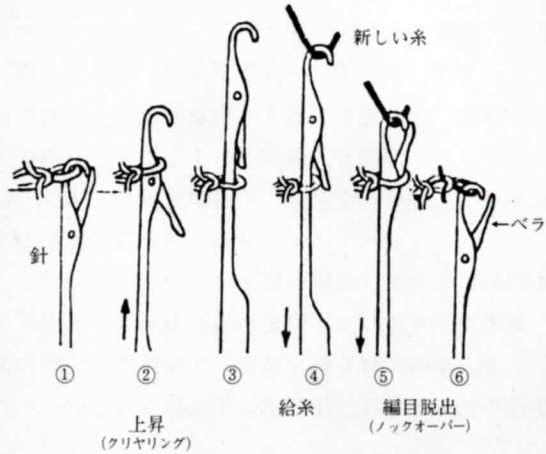
ニットは、1本或は、1本の働きをする数本の糸、または、ひも状のもので、ループを作り、ヨコ方向、タテ方向に、順次ループをからみあわせて形づくる布及び製品のことです。

編み立ての原理を解り易く説明すると下図のようにになります。

### 編み立ての原理

針床が一つの編機を『シングル編機』といい、ペラ針使用と、ヒゲ針使用の2種類があります。

ここでは、ペラ針使用の編機の場合について説明します。



ペラ針使用の編成動作は「右図」に示す通りです。

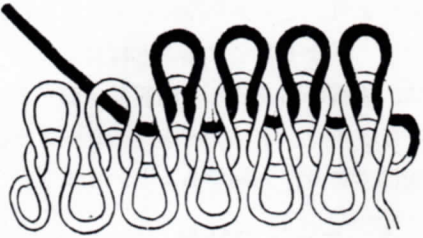
(ペラ針の編目形成運動)

- ① 旧ループが針の先端にひっかかっています。
- ② 針が上昇すると、旧ループによりペラが自動的に開かれます。
- ③ 上昇し終ると、旧ループからペラも脱出します。
- ④ 針に新しい糸を給糸します。
- ⑤ 針が下降すると、旧ループによりペラが自動的に閉じます。
- ⑥ さらに下降すると、旧ループより編糸が引き出され、新しいループが出来ます。

ニットは、構造により『よこ編』と『たて編』の2つに分けられます。

よこ編は、水平または、垂直の方向に植えられた針によって、次の図のように、1本の糸のループを順次からみ合せて布にします。

(よこ編)

**特 徴**

- 編み糸が横方向に走っています。
- 伸縮が比較的大きい。
- ほつれやすい。

たて編は、垂直方向に植えられた針によって、次の図のように、糸どうしをからみ合わせて布にします。

(たて編)

**特 徴**

- 編み糸が縦方向にならんでいます。
- 伸縮が比較的少ない。
- 一般的にほつれにくい。

よこ編は、往復運動で編成する「横編」と、回転運動で編成する「丸編」とに区分されます。

たて編は、編機の種類により、トリコット、ラッセル、ミラニーズなど区別して呼んでいます。

**トリコット**

ヒゲ針を用いて編む密度の高い、繊細で柔軟な編地で、ランジェリー、ファンデーションが中心で、裏地や靴下にも用いられます。

**ラッセル**

トリコットに似ているが、トリコットよりややあらい編み方で、ジャガード紋織模様に編み、レースの感じに仕上げ、肌着、外衣の他、ふきんやインテリアなどに用いられます。

**ミラニーズ**

2つのオサ(導糸針)で布巾いっばいに、ひし型あるいは、針めに交差するように2本の糸で編み、肌着、セーターなどに用いられます。

以上ニットの種類を、製造方法あるいは、使用編機の種類により、大きく分類しましたが、私達が日常生活の中で、家庭用に多く使っているニットは、横

編であり、セーターやカーディガンは、その代表であります。

また、よく耳にすることばに「カットソー」という表現がありますが、これは、丸編の布を使った縫製品全般を云います。

Tシャツ、ポロシャツ、トレーナー、ブルゾンなどの大半は、カットソーの製品であり、丸編であると云えます。

### 3. ニットの特徴

ニットは、製造方法からくる特徴としまして、糸のループから出来ているため、ソフトで伸縮性に富む、機能性のすぐれた布であると云えます。

肌着、セーター、ジョギングウェア、トレーナーなどの運動機能が強く要求される用途については、ニットは、最も適しています。

また、ニットは織物に比較して、よりファッション性が高い素材であると云われ、特に婦人カジュアル用途に多く使用されています。

また、生産性は高く、短時間で簡単に布をつくる事が出来るため、市場の要求に対応し易く、少ロット対応も比較的容易です。

一般に、ニットは、編組織が多孔性であるため、通気性が大であると同時に、含気性があるため、編組織の厚みや、密度が高い場合、保温性に優れたものとなります。

更に、織物に比較して、使用する編機によっては、編地の巾を変えたり、編柄を途中で変化させるなど、成型編が可能で、裁断や縫製が部分的に省略される場合もあります。

その他、ニットは一般家庭で縫製が困難なため、一般消費用としての切り売りには適さないようです。

### 4. ニット素材について

ニットに使用されている素材は、外衣の場合、動物性繊維、特にウール（羊毛）が最も一般的で、ウールは保温性、伸縮性、吸湿性にすぐれ、化学繊維との混紡、交編により、用途に応じた展開の広がりを見せています。

内衣（ニットシャツ、ナイティーなど）や肌着の場合、植物性繊維が多く使用され、綿、麻が近年大へん人気素材となっています。

これら天然繊維の他、ナイロン、ポリエステルやアクリルなどの化学繊維も、独特の風合や機能を持ち、多くの用途に使用されています。

いづれにしても、ニットは使用する素材の材質感が非常に敏感に風合+生地表情に表われるため、特に用途に応じた素材の選定は重要な要素となります。

## 5. 衣料用ニットの商品展開について

### ——多様化するニット——

衣料としてのニットは、肌着から始まり、ナイティー、Tシャツ、更にセーター、ポロシャツ、ニットシャツで急速に用途が拡大されました。

更に、ニットが飛躍的に量的拡大を見せたのは、スポーツ衣料における短繊維ニットの開発であります。

昭和50年代に入って、スポーツ業界はアスレチックブームにわいた。国民のスポーツ熱は高まり、バスケット、サッカーなど各種競技ウェア、ジョギングウェアの売行は急に伸びました。

一方、ニットの加工技術は、機能開発を中心に次々に研究開発され、品質の向上と相俟って、ニット化が進む大きな原因となりました。

更に、裏毛のトレーナー以後、最近は綿ニットのアウトター分野への進出が急で、ダブルフェース、畦などの新しい編地が開発され、また、二層、三層の多重構造の厚地ニットが開発されるなど、カジュアル用ニットの分野が大きく広がりました。

### ニット製品図

#### ① セーター

ニットの厚手着の総称で、プルオーバーとカーディガンとに分けられます。



プルオーバー



カーディガン

## ② ポロシャツ

もとは、ポロ競技に着用されたシャツのことで、えりつきの半そでシャツのこと。スポーツに、遊び着に広く着用されています。



ポロシャツ

## ③ Tシャツ

えりなしのブルオーバー型のシャツで、Tの字に似ていることからきた呼び名です。

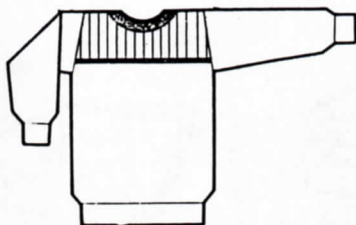


Tシャツ

## ④ トレーナー

一般的には、裏毛編のブルゾンタイプのジャケットをいいます。

本来、スポーツの前後に着用したのですが、現在では、カジュアル用途に広く着用されています。



トレーナー

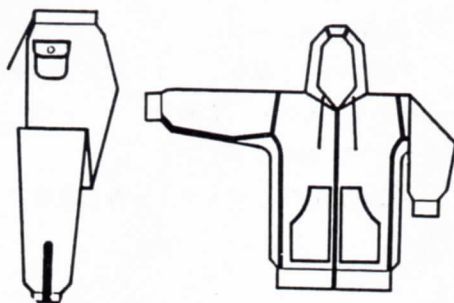
## ⑤ ブルゾン

ウエスト部分をベルト+タックなどで止め、腹部をふくらませたジャケットのことです。



ブルゾン

- ⑥ スウェットシャツ&パンツ  
スポーツ用として、汗よけのため  
に着用する裏起毛したセーター  
とパンツのことで。



スウェットシャツ&amp;パンツ

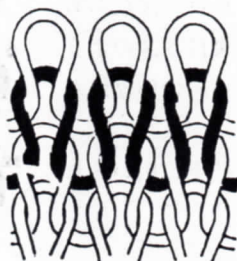
## よこ編組織図

## ① 平編(天竺)

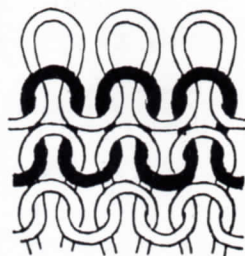
最も基本的な組織で、シングル編機で編成されます。

編地の表面で表目のみあらわれ、裏面では、表面とは逆の編目があらわれ、表と裏との編目の形が異なる編地です。

主たる用途は、肌着やシャツです。



表目



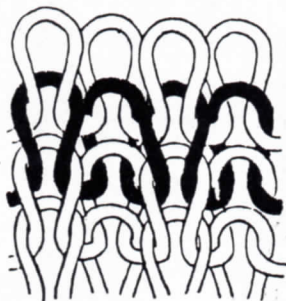
裏目

平編地

## ② ゴム編(フライス)

ダブル編機で編成され、ウェール毎に表目・裏目が交互にあらわれるもので、原則として表裏の区別はなく、同じ外観をしています。

主たる用途は、セーターや附属関係です。

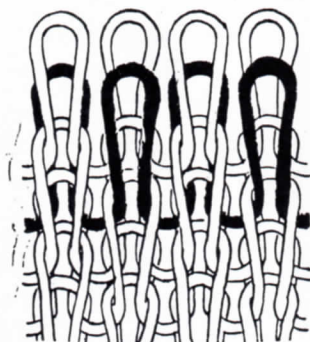


ゴム編地

## ③ 両面編 (スムーズ)

2種類の針で編成し、ゴム編が2つ重なったようなもので、表面がなめらかで、密なダブル編のニットです。

主なる用途は、ナイティー及び肌着です。

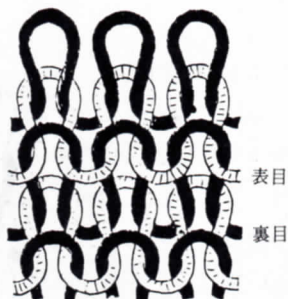


両面編

## ④ パール編

各コース毎に、表目、裏目が交互にあられるもので、表目、裏目が図のように交互であるため、たて方向の伸縮性が大きい。

主として、セーター、靴下に用いられます。

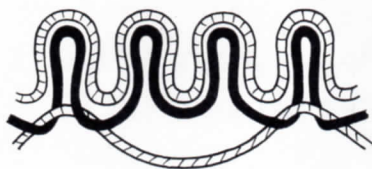


パール編

## ⑤ 裏毛編

裏糸に太番手の糸を使い、これを起毛して、パイル状にしたシングル編のニットです。

用途は、トレーナー、ブルゾンなどです。



裏毛編

## 6. ニット用原糸について

### —原糸の特徴—

ニットに使用する糸は、普通織物用の糸に比べて、よりが少なく、柔軟で弾力性に富み、太さが均等で、毛羽やスラブがないものを選びます。

また、糸の結び目が少なく、小さいことが品質のよい編地の条件となります。最近では、スプライサー（独得の方法で糸を結びつける機械）でつないだ結び目のない糸も開発されています。

裏毛に使われる太番手の糸は、通常糸に比べ、よりが10%少ない。裏毛を美しくソフトに仕上げるためです。

### —原糸の種類—

- ①綿糸：綿花を原料とし、諸工程をほどこした糸で、紡績糸としてすぐれています。ニットでは特に、丸編用原糸として使用することが多い。
- ②毛糸：通常は、動物の毛（羊毛が多い）を用いた糸をいいますが、広い意味では、合成繊維などを混紡したのも毛糸と呼ぶ場合があります。  
横編用原糸として使用することが多い。
- ③混紡糸：2種類以上の繊維を混ぜて紡績した糸のことで、使用目的に合わせて、異質の特性を持った繊維を混ぜ合わせ、風合や弾力性、光沢、強力などを調整します。
- ④合繊糸：天然繊維を全く使わず、化学的に合成した糸で、熱を加えたり、よりを与えることにより、伸縮性やバルキー性を持たせた糸もあります。レーヨン、ポリエステル、ナイロン、アクリルなどの品種があります。

### —糸開発と新市場への広がり—

ニットは、ますます多様化、個性化の方向をたどり、ニットシャツ（ゴルフシャツ、ポロシャツ）やスポーツ衣料からカジュアル衣料の分野へと広がりました。

今や肌着を中心とした実用衣料としてのメリヤス時代から、感性が重視され

るアウターの時代に入りました。

ニット用原糸も、複合素材の時代を迎えて、ますます複雑になり、表面効果を出すために意匠撚糸が次々に開発されたり、ボリューム感、ソフト、軽さなどを求めて、その目的に合った意匠紡績糸が開発されたり、従来なかった新しい感覚の糸、インディゴニット糸が開発されるなど、ニットは新しい時代を迎えたと云えます。

- ①意匠撚糸：さまざまな表面変化や風合を出すために、1本あるいは2本以上の糸をそろえて、よりをかけた新しい表情の糸。
- ②意匠紡績糸：糸によりをほとんどかけずソフトで、軽く仕上げをした紡績糸。
- ③インディゴニット糸：ブルーデニムとして、広く親しまれているインディゴ染をニットに適用した先染糸。

## 7. ニットの加工技術の発達

ニットは近年、加工技術、特に仕上加工技術の開発が大きく前進することにより、新しい用途が次々と開拓されました。

イージーケア加工（W&W性）、柔軟加工、防縮加工など高度な加工技術の開発は、ニットのアウター分野への広がりを促したと云えます。

また、ニットの加工技術の発達は、スポーツウェア素材の開発に重要な関係があり、白度の均一性、湿摩擦堅牢度、吸汗発散性、透湿防水性、防臭抗菌性など、すべてスポーツ衣料に必要な機能として開発されました。

その後、ニットは複合機能の時代に入り、機能素材時代の最盛期を迎えました。

そして今、ニットは、よりニットらしさを求めて、糸そのものの特性を生かす方向へ、つまり、糸の開発が重視されるようになったのです。

(松下敏男)